

研究断想

大阪市西成区に釜ヶ崎と呼ばれる寄せ場がある。釜ヶ崎という地名は通称で、行政上の正式名称は「あいりん地区」となっている。あいりん地区という名称は1960年代に立て続けに起こった暴動の対策として1966年に付けられた。よって、2016年は地区指定から50年目の節目の年なのだ。

あいりん地区は半世紀にわたり、一貫して社会から排除されがちな人々を受け入れてきた。しかし2013年から本格始動した再開発プロジェクト「西成特区構想」によって風向きが大きく変わった。この町は長年、地域住民・行政・支援団体の三者が対立しており、地域課題が放置される傾向があった。しかし、西成特区構想を契機に三者の連携が進み、これまでにないスピードで町が激変している。

あいりん対策で設けられた保護施設は次々と閉鎖されている。公園でテントや小屋を建てて暮らすことが禁じられるようになった。日雇労働者の根城だった簡易宿泊所には、外国人旅行客が泊まるようになり、近年ではすっかり彼らが主要な客になった。今やあいりん地区およびその周辺には旅行客やビジネス客を見込んだホテル建設の準備が着々と進んでおり、インバウンドの拠点となりつつある。1970年に設立されたあいりん総合センター（日雇労働者が就労先を見つける場所）も、数年後に解体さ

れることが決まった。解体後の空いた土地はターミナル駅に隣接しているため、目下、駅前の賑わいづくりが検討中だ。

古くからの地域住民にとって西成特区構想は「普通の町」になる千載一遇のチャンスと捉えられる傾向がある。一方、日雇労働者や野宿者、そして近年になって生活保護を受けて地域定住した人々の反応は不思議なぐらい薄い。彼らを支えてきたセーフティネットが解体しつつあるにもかかわらず、である。

あいりん地区（釜ヶ崎）は都市問題を研究する社会学者たちの関心の対象であり続けてきたが、今や終焉のときが近づいている。今、私はふたつのことに関心を持っている。ひとつはあいりん地区が、どのように終わりゆくのか、その過程を丁寧に記述すること。もうひとつは貧困の地域拡散を捉えることである。2015年の生活困窮者自立支援法の施行が象徴するように、特定地域に貧困問題を集中させてきた従来のあり方が見直され、それぞれの自治体で受け止め対処することが現代日本の課題となっている。よって、今後の都市問題を扱う研究においては、貧困を生み出すメカニズムを把握することはもちろんのこと、拡散する貧困の動態解明が一層の重要性を帯びるといえるだろう。

（白波瀬 達也）

理論と動態 9号

2016年12月10日発行

編集・発行 特定非営利活動法人
社会理論・動態研究所
〒732-0026 広島市東区中山中町 15-33
Tel.Fax: + 81 (82) 289-6385
E-mail: info@istdjapan.org
http://istdjapan.org/

印刷 (有) スタディ
〒720-0805 福山市御門町 1-8-11
Tel.Fax: + 81 (84) 958-5535